

こころ 私とKの優劣関係

二六

「それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥にKの室から出たと思いました。」
 「私には気のせいとかその簡単な挨拶が少し堅いように聞こえました。どこかで自然を踏み外しているような調子として、私の鼓膜に響いたのです。」
 「今まで長い問世話になっていただけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかったのですから。」
 「一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんが一緒に話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。」

二七

「私の問題はおもに二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどのように見ているか知りたかったのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見分けがつかないような返事ばかりするのです。」
 「私は彼の迂闊を笑ってやりました。そうして女の価値はそんなところにあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。」
 「私にはそこが愉快でした。彼のふんと云ったような調子が、依然として女を軽蔑しているように見えただけです。」
 「私のKに対する嫉妬は、その時にもう十分萌していたのです。」

二八

「私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。」
 「しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はたださえKと宅のものがだんだん親しくなっていくのを見てるのが、あまり好い心持ちではなかったのです。」
 「私は自分のそばにこうじつとして座っているものが、Kでなくって、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思うことがよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いて岩の上に座っているのではないかしらと忽然疑い出すのです。」
 「私は不意に立ち上がります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴ります。……ただや蛮人のごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟頸を後ろからぐいと攫みました。こうして海の中へ突き落としたらどうすると云ってKに聞きました。」
 「Kは動きませんでした。後ろ向きのまま、ちょうど好い、やってくれと答えました。」
 「Kの神経衰弱はこのときもうだいぶよくなっていったらしいのです。それと反比例に、私の方がだんだん過敏になってきていたのです。私は自分より落ち着いているKを見て、うらやましがりました。また憎らしがりました。彼はどうしても私に取り合う気色を見せなかつたからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。」

私 K
お嬢さんにKが接近する焦り。

私 K
奥さんの態度にも不信感を抱く。

私 K
Kにたいして初めての行動。行動に出るまで焦ってきた。

私 K
嫉妬はしているが、少々安心した。

私 K
Kを残していけば、お嬢さんともっと親しくなるのではないかという危惧。

私 K
自分で自分を追いつめていく。(私が勝手に考えを広げていく。)

私 K
かなり煮詰まっている。訳の分からない行動をするようになってきている。若さ？未熟さ？

私 K
「うらやましい」という言葉は、「上のものに対するあこがれ」と解釈できるのである。よって、ここで逆転現象が起きている。
 「Kの自信に対するうらやましさ。」
 「自分には何の自信もない。お嬢さんに対する自信もない。」

「けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとすれば、私は決して彼を許すことが出来なくなるのです。」

「私は思い切って自分の心をKに打ち明けようと思いました。」

「容貌もKの方が女に好かれるように見えました。性質も私のようにこせこせしないところが、異性には気に入るだろうと思われました。どこか間が抜けていて、それでどこかにしつかりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。」

「すべて向うの好いところだけがこう一度に目先へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐもとの不安に立ち返るのです。」

「私は急に帰りたくなりました。実はKを東京へ帰したくなかつたのかも知れません。」

「私は平生の通りKと口を利きながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。」

「精神的に向上心がないものは馬鹿だと云って、なんだか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蟠っていますから、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑って受け取るわけに行きません。私は私で弁解を始めたのです。」

「その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。」

「私にはこの上もない好い機会が与えられたのに、知らない振りをしてなぜそれをやり過ごしたのだろうという悔恨の念が燃えたのです……事実を蒸留してこしらえた理論などをKの耳に吹き込むよりも原の形そのままを彼の目の前に露出した方が、私にはたしかに利益だつたでしょう。」

「我々は真つ黒になつて東京へ帰りました。かえつたときは私の気分がまた変わっていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈はほとんど頭の中に残っていませんでした。Kにも宗家らしい様子が全く見えなくなりました。おそらく彼の心のどこにも霊がどうの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかったでしょう。」

「お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと云つてまた笑い出しました。旅行前時々腹の立つた私もその時だけは愉快な心持ちがしました。場合が場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしよう。」

「許すことが出来なくなる」と言うようにかなり切迫している。焦っている。「このままではお嬢さんをとられてしまふ。」という考えである。Kの優勢

先にKに打ち明ければKは退くかもしれない。焦り。いちだち。Kが優勢に立つたから、それを引き戻そうとする考え。打ち明けようと思つほど、Kの優勢が顕わになつてきた。

K 私 「恋愛」の面においても、Kにはかなわないという劣等感。

こんなに好いとこだらけのKを東京へ帰したら、お嬢さんをとられるに決まつている。

平生の「私」ではない。Kが優位に立つている焦り？

K 私 このままKにやり込められて入れられないという焦り。

「人間らしさ」においてKの上に立つと思つた。

ここで打ちのめしておけばよかつたという後悔。まだKの方が優位。

具体的に自分はお嬢さんのことが好きだと言えよかつた。後悔。

K 私 夏の暑い中、うんうんうなつて、歩いていたり、また、Kという話したため、ふつ切れた部分があつた？

Kにも思い詰めた様子もなくなつてきたので、余裕が出てきた。恋や、愛などのことを考えなくなつた？（お嬢さんからだいが離れたため。）

Kが変わつたことによつて、余裕が出てきた。お嬢さんに対するいらだちも消えていった。

Kとお嬢さんとのやりとりを見るのがなくなつたから、余裕ができた？ また二人のやりとりを見るようになるというらだつ？

「それのみならず私はお嬢さんの態度の少し前と変わっているのに気がつきました。……お嬢さんがすべて私の方を先にして、Kを後廻しにするように見えたのです。……つまりお嬢さんは私だけに解るように、持ち前の親切を余分に私の方へ割り当ててくれたのです。」

「私は心の中でひそかに彼に対する凱歌を奏しました。」

「それではないと思っていたKの声がひよいと聞こえる。同時に私のお嬢さんの笑い声側の耳に響きました。……しかしお嬢さんはもうそこにはいなかったのです。私はあたかもKの室から逃れ出るように去るその後姿をちらりと認めただけでした。」

「そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になってきました。Kと私がいつしよに宅にいたときでも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました。……是非お嬢さんを占有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。」

私に余裕が出来たため、お嬢さんが私の方を向くようになった？以前はなんか、がつがつしているようで、お嬢さんはちよつと離れた？

私

K

「私だけに解るように」というのがミソである。二人の秘密 Kへの優越。

いままでうまくいっていたと思っていたが、海に行く以前の「お嬢さんとKが好きあつているのでは？」という危惧が浮かんでくる。

お嬢さんの態度のおかしさに気づく。

お嬢さんに対する自信が揺らいでくる。

私

K

このころからKに対する嫉妬が表に出てくる。

「お嬢さんはKを特別扱いしている。」という嫉妬の気持ち。

K

私